

日本経済新聞

学校で必修のがん教育 医聖・華岡青洲の里、和歌山との縁



中学と高校の学習指導要領が改訂され、学校での「がん教育」が必修化されました。ところが、このことはあまり知られていません。地方講演の際に私が実施したアンケートでも、「学校でがん教育が行われていることを知っていた」と答えた人は1割程度にとどまりました。

教科書も一新され、がんができるメカニズムから始まり、生活習慣による予防、受けるべきがん検診、放射線治療、緩和ケア、がん患者との共生まで、がんについて知るべきすべてが記載されています。中学生や高校生のお子さんがある方はぜひ、保健体育の

教科書をご一読ください。

がん教育の必修化には、私も深く関わりました。きっかけのひとつが和歌山県紀の川市とのご縁です。

江戸っ子の私と紀の川市をつないだのは、江戸時代の医学者・華岡青洲（せいしゅう）でした。東日本大震災の直前に紀の川市で行ったがんの市民講演会のあと、市内にある青洲の住居兼診療所「春林軒（しゅんりんけん）」を訪れました。青洲はここで、麻酔薬「通仙散（別名・麻沸散、まふつさん）」を開発し、世界初の全身麻酔下での乳がん手術を成功させました。

青洲の先駆的な治療に魅了された私は同市の「健康推進アドバイザー」に就任し、学校でのがんの授業を提案しました。その後、市内の全中学校の生徒に対するがん教育が始まったのです。

その和歌山県で産官学連携のイベントが予定されています。がん保険の草分けであるアフラック生命保険と同県、和歌山県立医科大学が協力し、がん啓発のイベントを12月13日に開催します。テーマは「若者の視点から、地域のみなさんへがんのことを伝える」です。

和歌山県はがん検診受診率が全国平均を下回るという課題を抱えており、特に若年層の意識が低いことが問題視されてきました。今回のイベントは、学生主導で地域の背景を踏まえて住民にアプローチする画期的な試みです。

当日の目玉は、県立医科大学の学生たちが企画・制作した啓発資料とクイズコーナーです。がんの基礎知識を楽しく学べるよう、学生たちの手でポスターやパンフレットを作成します。単なる知識の伝達ではなく「自分ごと化」を促し、子どもから高齢者まで巻き込むことを目指した工夫が光ります。

午後の講演に私も登壇します。タイトルは「大人も子どももがんを知る講座」。学生と対話しながら、地域全体のがんリテラシーを向上させたいと考えています。

今後、がんを知るための産官学の連携を各地で広めていきます。

2025年11月26日